

群 教 ゼ	101 - 08
	平 16.224集

# 学習習慣が定着していないAの 学校生活適応のための支援の工夫

- 情緒を安定させた生活を送れる指導実践を通して -

特別研修員 山口 紀子 (伊勢崎市立宮郷中学校)

## 《研究の概要》

情緒障害特殊学級に在籍し、情緒が不安定で学習習慣が身に付いていない生徒Aに対し、社会性の発達を主な目的とした個別の指導計画を作成し、指導を実施した。特に係活動や作業学習を中心に社会性を高める指導を行い、母親との連携を図った。その結果、係活動を自分からでき、作業学習において作業中の報告ができるなど、社会性が伸長し、学校生活に適応する様子が見られるようになってきた。

【キーワード：情緒障害 社会性 個別の指導計画 係活動 作業学習】

## 問題の概要

本研究の対象である生徒A（以下、A）は、知的障害はなく、本人の学習意欲が出てくれば基本的な学力に大きな問題はないように思われる。現在Aは、学習の大切さや必要性といったものを感じたり考えたりはしていないようである。校時表にそって学習をすすめるといったような学習習慣や、「離席せず授業を受ける」、「教師からの発問に答える」などといった学習態度なども身に付いておらず、そうした態度に対する教師からの注意や指示に我慢や従うことができずに怒り出す行動がみられる。

また、「自分からはあいさつをしない」、「身だしなみに注意をはらわない」、「偏食が強い」、「教室内を歩き回る」、周りにいる人間と自分からかかわろうとすることや、会話をしようとする態度があまり見られない、など社会性の発達に課題がある。

S - M社会生活能力検査の結果（平成16年5月実施）を見ると「社会生活指数」が落ち込んでおり、特に、「集団参加」が大変弱いということが確認された。

Aには、社会性に視点をあてて、学習習慣を含めた学校での基本的な生活習慣が身に付くようにし、集団の場である学校生活に落ち着いて参加・適応できるような指導が必要であると考えられる。

## 対象生徒の実態

### 1 対象生徒

A 情緒障害特殊学級在籍

### 2 実態

#### (1) 中学校入学まで

ア 2～3歳頃の行動の様子

- ・言葉が遅く、いつも走っている状態に近く、行動が落ち着いていなかった。

## イ 診断

- ・保護者がいくつかのクリニックや施設を訪問し、多動症、注意欠陥、高機能自閉症などと過去にいわれてきた。

## ウ 小学校

- ・就学前から小学6年生まで、情緒障害のために、市内の発達相談室（通級指導教室）に通級による相談を続けた。
- ・小学校では通常の学級に在籍していた。入学当初は席についていられず、教室から出て行ってしまふなどの行動が頻繁にみられ、母親や相談室の教師が付いていることで、徐々に落ちついていき、席についていることはできるようになった。
- ・中学年の頃は、「自分の興味のある話題では友達と会話をする」、「作文・絵などは担任が一对一で指導すると書く（描く）」という状態であった。
- ・次第に友達関係や学習に対してつまずきが大きくなっていき、6年の運動会の練習や、総合的な学習の時間でグループによる調べ学習を行っている頃から、不登校になっていった。
- ・相談室への通級と週1回程度の自校のカウンセラーの先生との相談の時間には出席していた。

## エ 中学校入学

- ・情緒障害特殊学級に入級。入学式の日から、特学の教室を自分の居場所と決めて登校できた。
- ・登校の習慣が身につくことを第一と考え、遅刻や早退はあるもののあまり細かいことは指摘しなかった。そのため、ほぼ毎日登校ができるようになった。

## (2) 今年度当初の様子

### ア 登下校

- ・前担任との約束「朝早く登校するか、6時間目まで学校に残ること」を守り、1年時後半より若干早く登校してきている。5校時の始業のチャイムが鳴った後、下校する。

### イ 学習

- ・気分の良いときに気の向いたものしか取り組もうとせず、教室内を歩き回るなどして毎時間を過ごすことが多い。
- ・新担任となった筆者から提案される短時間でできる学習内容に対しては、面倒くさそうにはあるが誘いにのって学習したことがあり、そんなときには教室内を歩き回るなどの行動はあまり見られない。
- ・読字は好み、1時間近く集中して「教科書を読む」といった学習に取り組んだこともある。逆に書字は好まず、特に漢字やアルファベットは嫌がる傾向にある。
- ・簡単な提案や指示に対し、ほとんどの場合本人がやりたくなければ「やらない」と拒否し、さらに誘うと頭を抱えて「うー！」と言って簡単に怒り出す。

### ウ 校内での様子

- ・同学年の生徒と顔を合わせることを避け、登校後、教室に入ると、トイレや特別な用事以外では、下校まで教室を出ようとはしない。用事があって教室を出るときには足早である。

### エ 家庭において

- ・外出はしたがない。好きな本やゲームなどの買い物も自分では行かずに家族に頼んだり、店まで行ってもレジでのやりとりは母親等に頼んだりしていることが多い。
- ・休日や下校後はゲームをしたり本を読んだりして過ごしている。

### オ 社会生活能力検査の結果

・S - M社会生活能力検査を行ったところ、社会生活指数が54と低く、とくに「集団参加」の力が他に比べて大変弱いことがわかった。

## 研究のねらい

情緒障害特殊学級に在籍するAについて、実態を踏まえた個別の指導計画を作成し、それにもとづいた係活動や作業学習を中心とした社会生活能力を高める指導実践を行っていくことにより、情緒を安定させた生活が送れ、学校生活に適應できるように有効な実際の指導の手だてをさぐる。

## 基本的な考え方

### 1 実践の内容

- (1) 個別の指導計画を作成する。
- (2) 個別の指導計画にもとづいた係活動や作業学習などを通して、連絡・報告の方法、責任を果たすなどのルールやあいさつなどのマナーといった集団における生活態度が身に付くように、社会性を育てていく。
- (3) 個別の指導計画にもとづいた学習への取り組みにより、学習習慣や学習態度の確立及び定着を図り、落ち着いた学校生活を送れるようにする。

### 2 指導方針と方法

- (1) 次のような指導方針で実践を行っていく。
  - ア 主に信頼関係づくりのための配慮
    - ・自尊心を大切にする。
  - イ 指導上の配慮として
    - ・ことばへの配慮  
「聴覚的な注意をきちんと向けられなかったりばらばらに入ってきた音を頭の中で意味あるものへと組み立てることに困難がある」「自分が言いたいことばを頭のなかの記憶の貯蔵庫から引っ張り出してくることに困難がある」などに関して配慮する。
    - ・行動療法の活用  
適する行動の強化・シェイピング<sup>\*1</sup>・対立行動分化強化<sup>\*2</sup>などを行う。
    - ・ストレスを考慮  
順調に見える時にこそ、原因への配慮が必要であることを忘れない。
    - ・興味・関心を生かした学習活動  
周りの人の理解を得て、基本的なルールが意識できることを守れるようにする。
    - ・特性に応じた指導  
本人の気持ちの状態をよく把握して、物理的な距離を適度に保って接する。
    - ・行動の原因を分析した指導

---

\*1 新しいスキルを教える時に、系統立てて少しずつスキルを強化していく方法

\*2 問題となる行動に対しそれを同時にはできない行動をさせ、それを強化していくことで不適切な行動を減らしていこうとする方法

A - B - C分析<sup>\*1</sup>を参考にする。

(2) 指導方針を受け、次のような方法で実践を行っていく。

ア 実態把握

- ・ 母親、旧担任、発達相談室の担当教員から前年度までの様子を聞く。
- ・ 心理検査等の実施

イ 「個別の指導計画」の作成

- ・ 個別の指導計画の様式を作成し、実態を受けてAの個別の指導計画を作成する。

ウ 個別の指導計画にもとづいたAへの指導

- ・ Aの特性に応じて、計画的に指導し、評価・改善を図って志度失せきるように作成する。

エ 母親との連携

- ・ 年度当初に前担任とともに家庭訪問を行い、それまでの経過やこれからのAに対する接し方や母親との基本的な連携の進め方についての確認をする。
- ・ 毎日の連絡ノートや、必要に応じた電話連絡や家庭訪問により連絡を密にとる。

オ 研究授業の実施

- ・ 授業研究会の結果を指導に生かす。

3 計画

1 学期

実態把握

- ・ 本人の観察を通じて、特性をさらに理解したり、本人から話をよく聞いたりして常時、信頼関係づくりに努める
- ・ できるだけ過去にさかのぼって、保護者、旧担任や担当者から本人の実態について聞く
- ・ 保護者の話を聞く

個別の指導計画の様式の作成

個別の指導計画の作成

個別の指導計画の短期目標にもとづいたAへの指導実践

夏休み

家庭訪問

- ・ チャレンジウィーク<sup>\*2</sup>参加についての相談をする
  - ・ 生活の様子、情緒面についての情報交換をする
- 個別の指導計画の作成と見直し

2 学期

- ・ 1学期の指導の結果や評価から新たに2学期の計画を考える

個別の指導計画の短期目標にもとづいたAへの指導実践及び指導の改善・工夫

- ・ チャレンジウィーク、その他の行事への参加を促す
- 研究授業を行う

冬休み

家庭訪問

- ・ 生活の様子、情緒面についての情報交換をする
- 個別の指導計画の修正

- ・ 2学期の指導の結果や評価から新たに3学期の計画を考える

3 学期

個別の指導計画の短期目標にもとづいたAへの指導実践及び指導の改善・工夫

---

\*1 問題行動の前後に何が起きていたかを逸話的に記入する記録方法

\*2 総合的な学習の「人について」追求する学習内容の一環として、5日間実際の事業所で仕事の体験をする。Aに対しては、学習の目的を社会面・対人面を学習する場と考える。

- ・ P T A バザーでの作業学習の製品の販売を促す  
研究のまとめ

## 実践

### 1 観察と面談を通じた実態把握

- 4月～
  - ・ 本人を観察する
  - ・ 母親とノートでの連絡を始める
- 4～6月
  - ・ 母親と面談し、今までの経緯や最近の様子を聞く。
- 5月
  - ・ S - M 社会生活能力検査の実施
- 5～6月
  - ・ 市内発達相談室の担当だった教員に面談し、当時の様子を聞く
  - ・ A の小学校 4・5・6 年時の担任に面談し、当時の様子を聞く

### 2 「個別の指導計画」の作成

(書式は添付資料)

文献 3) を参考に、実態にもとづき次のような項目で指導の方向性を決め、個別の指導計画を作成する。

- (1) 氏名・生年月日・主治医等
- (2) 進路の希望(本人・保護者)
- (3) 家庭との連携
- (4) 実態(社会面・生活面・情緒面・学習面・健康面等)
- (5) 今年度の目標(長期目標)
- (6) 学期ごとの取り組み(短期目標・手だて・評価と次学期への方向性)

### 3 A への指導の概要

#### (1) 1 学期と夏休みの指導

( 良い場面 課題のある場面 )

場 面	指 導 の 内 容 と 経 過
教 科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4 月初めは英語・オセロといった限られたものに対して興味を示し、取り組む場面があり、1 日 2 個程度担任からの課題をこなせていたが、後半から「やらない」といって学習に向かう時間が減ってきた。( )</li> <li>・ 校内の時間割が変わったのを機に、A の時間割を本人の目の前で組み直す。それに沿って毎時間の学習を進めたところ、以前に比べ学習への取りかかりに時間がかからなくなり集中できる時間が増えてきた。( )</li> </ul>
作業学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6 月より踏み台製作を開始する。最初に授業で「丁寧に製品を作って販売し、売り上げが出たら、美味しい物を食べて打ち上げ会をしよう」という言葉かけをすると、嬉しそうな表情で聞き、のこぎり引きの作業にも集中して丁寧に取り組むことができた。( )</li> <li>・ 5 校時終業のチャイムがなるまで学校に残り作業を続ける日がでてきた。</li> <li>・ 徐々にではあるが挨拶、連絡等、普通の授業であまりできていないことに対しても取り組む姿勢がでてきた。( )</li> </ul>
係 活 動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5 月下旬ころより配膳台を拭く、欠席調査票を保健室に置きに行くという係の仕事ができるようになってきた。( )</li> <li>・ 6 月下旬以降、声かけをしなくても取り組むことが時々あった。( )</li> </ul>
日常生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4 月中・下旬ころより、担任に対し煩わしそうに接するようになってきた。( )</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月ころより、以前に比べ、担任と話をするようになり、Aの考えていることや感じていることをわずかずつではあるが聞くことができてきた。( )</li> </ul>
夏 休 み	<p>家庭訪問1回目(7月下旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・母親が声をかけても本人は顔を出さず、40分ほどの訪問の後、再度母親が言葉をかけるとゲームをしていた。帰り際に担任が言葉をかけると大変怒った。( )</li> </ul> <p>家庭訪問2回目(8月下旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最初担任の顔を少し見てから奥へ入っていった。表情が明るかった。何度か担任と母親が話をしている部屋に入ってきた。そばにいた猫の話題などで話しかけると少し返事をした。( )</li> </ul>

(2) 1学期と夏休みの指導のまとめ

朝、学習内容を予告しておいた方が比較的、安定して取り組めた。

今やりたくない学習であっても、「後でやる」などの約束を交換条件として伝え、本人が納得できると学習に取り組めることが多かった。

火曜日の5校時を作業の時間として設定し、本人に何度も予告しておいたところ、5校時の終わりまで残って作業することができ、継続して取り組むことができてきた。

4月には、担任が作成したAのための時間割表を提示しても、指ではじいて拒否していたが、7月に入り本人の目の前で時間割表を組むと、黙って見ていた。翌日からそれに従って授業を進めると、比較的安定した状態で取り組むことができた。

毎日の声かけにより、係活動ができるようになってきた。

(3) 2学期の指導

( 良い場面 課題のある場面 )

場 面	指 導 の 内 容 と 経 過
教 科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学期はじめは登校できたことを褒め、本格的に学習に入っていくには1週間ほどは様子を見ようと思ってはいたが、思った以上になかなか学習に取り組めなかった。( )</li> <li>・10月に入り、徐々に限られた学習には応ずるようになってきた(国語：プリント、英語：読んで訳してもらおうこと、数学：「文字を使った式」の問題を解く等)。( )</li> </ul>
作業学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1校時の作業学習の時にも短時間ながら取り組める日があった(9・10月)。( )</li> <li>・学校公開(10月)や研究授業(10・11月)で外部の人や多数の教員・保護者らが授業を参観したが、普段より長い時間集中して取り組んでいた。( )</li> <li>・5校時の作業学習に最後まで取り組める日が増えた。( )</li> <li>・作業の中であいさつや報告を声に出してできるようになってきた。( )</li> </ul>
係 活 動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月下旬から言われなくても配膳台を拭いたり欠席表を出したりする様子が出てきた。( )</li> <li>・ずっと言葉かけをしないしていると忘れてしまうようなので、毎日様子を見て忘れそうなときには言葉をかけた。( )</li> </ul>
日常生活 や 行事等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体育大会を母親に付き添ってもらい、空き教室から見学できた(9月)。( )</li> <li>・チャレンジウィークに参加できた。初日は参加できなかったが、2・3・5日目には午前中のみ参加し、作業(ぶどう園の作業用小物のホチキスの針取り)に取り組むことができ、あいさつもできた(10月)。( )</li> <li>・行事で外部の人や多数の教員・保護者らが授業を参観しても、情緒的に不安</li> </ul>

	定になることはなかった。( ) ・制服の第1ボタンをはめないことを担任から指摘されると、翌日、欠席して しまった。また、イライラしている時に教室内にいた他の生徒から注意を受 けたことで、我慢ができなくなってしまい空のペットボトルをその生徒に投 げつけ、担任から注意を受けたので、翌日も欠席してしまった。( )
--	--

(4) 2学期の指導のまとめ

翌日が「作業学習が5校時にある日である」と予告しておく、最後まで残って作業に取り組めることが多かった。

作業学習では全員で製品を作るということ、あいさつ・連絡・報告が大切であることを伝えてきたため、参加できる日が増え、自分から声を出して報告等ができるようになってきた。

行事(体育大会・チャレンジウィーク・研究授業等)に対しては、しっかり事前の予告をしてAに心構えをする時間を与えておくことで、見学や参加ができた。

注意を受けるなど本人にとってストレスが大きかった日の翌日は、欠席になりがちであった。

4 母親との連携

(1) 1学期と夏休み

家庭：家庭訪問 電話：電話連絡

方法	内 容
1 家庭	・家での過ごし方、最近の様子などを聞く。
2 家庭	・現在に至るまでの様子について、小学校時代を中心に聞く。 ・最近の学校と家での様子の情報交換をする。 ・最近医者を訪ねていないことの相談を受ける。迷っている様子なので主治医を訪ねることをすすめる。
3 電話	・校門を出る際、服装が乱れていることを担任以外の教員から注意され、パニックを起こしながら下校したので連絡を取る。この一件も一つのAの学習の材料としてとらえ、身だしなみも大事なマナーとして教えていこうという確認をとる。
4 家庭	・1学期を振り返って、特に後半の様子を説明する。 ・チャレンジウィークへの臨み方について担任としての考え(学校と家庭以外の場に出て社会面・対人面の学習をする機会としてとらえる)を伝える。
5 家庭	・2学期初めは登校できることを目標とし、「どんな時間に登校しても褒めて迎える」、「家を出るのが何時になってもかまわない」ことを伝える。 ・夏休み中、どんな風に過ごしてきたかを簡単に聞く。 (学習：前半は母の用意した漢字のドリルを1分ずつ取り組んだ。外出：家族で日帰り温泉に出かけた。ゲームソフトを母と買いに行った。兄と映画を見に行った。など)

(2) 2学期

家庭：家庭訪問 電話：電話連絡 連ノ：連絡ノート 三者：三者面談

方法	内 容
1 電話	・体育大会への参加をAにはたらきかけると、「校庭の見える教室から見学する」とAが担任と約束したので、電話とノートで調整をはかり、母親に付き添ってもらった。その際チャレンジウィークへの臨み方について再確認をした。基本的に担任の考えに任せて下さるとのことだった。

2	電話 ・ 連ノ	・ 欠席になりそうな時には担任の携帯電話に連絡をもらうことにし、様子を教えてもらった。欠席になってしまう日は、たいてい朝起きるところからうまくいかず、ぐずぐずした状態になってしまうとのこと。遅くなっても登校できそうなら来てほしいが、無理矢理というわけにはいけないので、家での対応は母親に任せる旨を伝えた。
3	三者	・ 最近の様子の情報交換や関連する幼いころの様子を聞いた。 S - M社会生活能力検査を母親にも実施してもらった結果、「担任の結果が同じであったこと」、「「集団参加」の面が弱く、そのためにも作業学習に力を入れて取り組んでいるのだということ」を伝えた。これから先、性に関してどう対応していったらよいか母親が少し悩み始めているということなので、いろいろな面で兄の出番を徐々に増やしていくよう心がけてほしいと伝えた。母より、Aが字を書かないことと翌日の服装等について本人が不安なときがあるようなので、自分で連絡帳を書かせたいと思うがどうか、という提案があり、良い考えだと思うのでやってみると返事をした。
4	電話	・ 学習への取り組みが滞ったり情緒が不安定だったりする時期は、本人に負担となりそうなことを当面排除し、小さなできたことを褒める積み重ねを心がけよう、とあらためて確認をする。

(3) 連携のまとめ（確認：確認事項 結果：その結果）

ア Aから何回か出た質問の「何故学校に行く必要があるのか？」という問いかけに対して  
確認：学校は行くもの、という「きまり」ということで通す。

確認：「勉強していることが将来の自分に役に立つ」という視点で状況に応じて様々な例を引用するなどしてなるべく詳しく説明する。

結果：本人から返事はないが、問いかけがなくなった。

イ 休んだときの家での過ごし方について

確認：休んで家にいた方が楽しいという状況を作らないために、本来学校にいるべき時間帯にはゲームや本を読むことはさせない。

結果：二日連続で休むことはなかった。

ウ 不安定な時への接し方について

確認：些細なことでも、できたことを褒める積み重ねを心がける。

結果：徐々に落ち着いた生活に戻ってきた。

5 研究授業

10月21日 作業学習で研究授業を実施した。概要は以下のとおりである。

(1) 単元名 踏み台を作ろう（木材加工）

(2) 単元設定の理由

ア Aの実態（省略）

イ 教材観

（略）Aの実態をふまえ、木材加工を題材とし、分担・協力して作業に取り組みさせることにより、あいさつ・連絡・報告を通して集団の一員としての意識をもつことができるであろうと考え、本題材を設定した。

(3) 目標

（全体）

自分の分担がわかり、意欲をもって自ら根気よく丁寧にやりとげる力を身に付ける。



(略)

(Aについて)

- ・自分から進んで作業に取り組み、根気よく丁寧に続ける力を身に付ける。
- ・報告や連絡を自分からする。

(4) 指導計画

40時間予定 本時は9 / 40

(略)

(5) 指導方針

作業への意欲づけのために、製品をバザーで販売することを目標として設定する。  
 のこぎりなどの手工具を多く使うことで、目と手の協応や材料・道具の握り方や足腰のバランス、作業姿勢、体力、腕力、立って仕事を続ける力等の作業遂行上、必要とされる基礎的な諸感覚・諸機能を向上できるようにする。

(6) 本時の学習

ア 本時のねらい

(全体)

自分の作業内容がわかり、自主的に取り組むことができる。

(Aについて)

- ・自分から声を出して連絡・報告をしようとする。

イ 展開

(生徒B・C・D・E・Fについては省略する)

具体的な学習活動 具体的な手だて うまうまできなかった場合の手だて)

学習活動	時間	グループ1 のこぎりびき		グループ2 脚の組み立て
		A (本生徒)	B・C	D・E・F
1 あいさつ 本時の学習 内容を知る	5分	言葉かけなどをして、大きな声で挨拶ができる。 個別の目標を作業表に記入するように促す。 のこぎり・げんのう・接着剤を取り扱うときの注意事項を確認する。 各自の分担作業を確認し、グループごとに別れさせる。		
2 班別作業 グループ1 補助具を使 いのこぎり で角材を切 断する グループ2 (略)	35分	補助具を使いのこぎりで切断できる。 横引きの刃を使い両手で切断できる。 連絡・報告をする。 正しいのこぎりびきができているときは、一緒にのこぎりびきをして正しく引くことができるようにする。	/	
		のこぎりびきの姿勢に注意して作業をできるようにする。 切断できたら報告できるまで見守る。 作業をしない場合には声かけをしながら取り組むことができるように促す。 報告後次の作業に移れない場合には言葉をかける。		
3 片づけ・ 清掃	5分	自分の使用した道具を片づけ、清掃をする。 指示に従って取り組むことができるように言葉かけなどで支援する。	/	
4 本時のま	5	本時の作業結果を記入し、取り組みについて自己評価する。		

とめ	分	書かない場合には言葉かけなどで支援する。		
評価	(A)	報告・連絡ができ、最後まで作業を続けることができたか。		

(7) 授業研究会 ( 研究協議：意見・感想 指導助言 )

Aは自分を理解してくれる社会集団(学級)には心を許してきているのではないかと感じた。社会性の欠如が、Aを閉鎖的にしている要因だろう。(教科担当教員)

確実に成長していると思うが、彼なりのペースがあり、それがとてもゆっくりなのだと思います。(教科担当教員)

Aは、1年生の時点では「毎日登校する」ということが目標に近かったので、作業学習を5校時の最後まで取り組むことや、あいさつや報告などはできていなかった。それらができるようになったので、成長を感じている。(前担任)

本日は、集団参加とコミュニケーションに視点をあてた授業であった。Aに少しずつ意識が出てきたかなと思われた。

Aがおがくずを丁寧にはいていたところ等は、こだわりでもあるが賞賛して良いであろう。励まし・賞賛は言葉かけによる支援である。

### 研究のまとめ

#### 1 個別の指導計画作成

学期ごとの目標と具体的手だてに沿って、指導の評価を行ってきたところ、次の学期へ生かすことができた。

評価を受けて、細かい修正を随時加えたところ、変容に応じた指導を行うことができた。

本来はAのためのものであるが、教員にとっても迷いがちであったものが、個別の指導計画を作成したところ、指導内容のよりどころとなった。

#### 2 Aへの指導から

興味を示した教科や内容を中心に取り組むことにより、1日や1時間の中で学習に向かうことができた。

比較的落ち着いた学校での生活が送れていると、登校してくる時間が早い日が出てきた。

必要に応じた言葉かけにより、言われなくても係活動ができるようになってきた。

予めの説明を行っておくことで、「体育大会を見学する」、「チャレンジウィークに参加する」、「5校時の作業学習に最後まで取り組む」といった良い面が出てきた。

「バザーで販売する」という意欲づけを行うことにより、「集団の中で協力して製品作りに取り組む」という態度、「あいさつや連絡を声に出して行う」という態度、「途中で怒ったり作業をやめてしまったりしないで最後まで取り組む」という態度が育ってきた。

#### 3 母親との連携から

毎日の連絡ノートで密に情報を提供することにより、Aの様子や担任の考えが伝わり、母親は担任に対して協力的な見方で臨み、家庭での接し方を考えてくれた。その結果、Aが早く登校できたり、5校時最後まで残れたりする日がでてきた。

体育大会当日はAに登校時から付き添い、Aが担任との約束を果たし、昨年ではできなかった行事を見学するという一つの大きな成果の手助けとなった。

#### 4 授業研究から

あいさつや報告ができるようになったり、5校時の最後まで残れるようになったりと、良い変容が見られてきていることが確認された。

少しずつ心を許し、集団へ参加してきているという評価があった。

Aの中に集団参加とコミュニケーションの意識が少しずつできてきているようであるという指摘があった。

## 今後の課題

今後、改善していかなくてはならない点としては、「教科の学習になかなか取り組めない」、「1校時の作業学習への取り組みには消極的である」、「目に砂が入ったり制服の着方を注意されたりするなどの些細なことが大きなストレスとなり翌日の欠席につながってしまう」などのAにとって解決しなければならない課題が多々ある。

担任やかかわりのある教員などに対しては、冗談のような会話をしたり注意されたりしても、以前ほど怒らなくなったりしてきている。また、あいさつも促されればできるようになってきている。このような様子から、担任や限られた数名にはAはより深く付き合えるようになってきている面もある。しかし、Aの変容は決して大きなものではなく、引き続き係活動や作業学習などを中心に社会生活能力を高めながら情緒が安定できるようにしていく必要がある。

今後は、本人がストレスを感じていく様子やその限界がどのあたりかなど、適切に見極められるよう、不安定な内面について細心の注意をはらいながらAへの地道な観察及び指導を続けながら、指導の手だての有効性を評価し、さらに改善を行っていかなければならない。

### <参考文献>

- ・内山 登紀夫 著 『高機能自閉症・アスペルガー症候群』 中央法規（2002）
- ・森 孝一 著 『LD・ADHD・高機能自閉症 就学&学習支援』 明治図書（2004）
- ・文部科学省 『小・中学校におけるLD（学習障害）、ADHD（注意欠陥/多動性障害）、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）』 文部科学省（2004）
- ・メリーアン・デムチャック/カレンW.ボサート 著 三田地真実訳 『問題行動のアセスメント』 学苑社（2004）